

## 生きて働く道徳教育

### ～防災教育に学び、防災教育を生かす～

五十嵐 正広

#### 【要旨】

本研究は、「特別の教科 道徳」に課せられた課題は何かを探ることからスタートした。それは、特設道徳が積み残した課題でもある。特設道徳に求められたものとは何かを明らかにし、その課題を解決するために、道徳教育の改善をはかるという主旨である。

第1章では、特設道徳設立時における課題を明らかにし、それを解決するために、防災教育に学び、それを生かすことを示した。まず、特設道徳設立時に示された課題は「習慣化・内面化・実践化」であることを述べた。道徳の時間は、まさに、内面化にある。その道徳の時間の指導を徹底させるために、内面化の指導に力点が置かれてきたのである。しかし、内面化を重視するあまり、実践化に乏しい道徳の時間となってしまった。「特別の教科 道徳」においては、その「実践化」を大きな課題として受け継がねばならない。児童生徒に、現実の困難な問題に主体的に対処することができる実効性のある力を育成していくのである。それを筆者は、内面的な自覚にとどまらない実効性であると捉えた。

災害時には、異常事態に直面しても正常の範囲内であると判断し、平静を保とうとする「正常性バイアス」が働くと言われる。人は危険が迫ってもすぐには逃げないとされている所以である。その災害時に、釜石小学校児童は、学校管理下外にもかかわらず全員無事に避難した。また、釜石東中学校の生徒は、率先避難者として、近隣の小学校・保育園及び近隣の住民を巻き込んで無事避難し、多くの命を救った。この避難行動に実効性へのヒントを求め、道徳科及び道徳教育の改善をはかろうと考えたのである。

第2章では、防災と防災教育の歩みを論じた後、東日本大震災を経験した児童生徒の学びを明らかにし、震災後の防災教育の問題点に言及した。

近年、増加激甚化する災害により、多くの人命や財産が失われている。災害の多くは自然災害であるが、人災であるとも言われている。「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈度を増す」と、明治期から昭和初期に活躍した寺田寅彦は、このように指摘している。日本人は、災害を避けることができない災いとして捉えてきた。被災を仕方のないこととしてしまう無常観があると言われている。常に自然に順応し、逆らわずに生きることを求められてきた。さらに、どんな時にも冷静に行動することも求められている。そのような精神性により、災禍を乗り越えてきたのである。

では、防災教育はどのように進められてきたのだろうか。戦後まで遡ると、学習指導要領昭和22年度社会科編においては、中学校2年生で防災に関する内容が6単元

中1単元取り上げられている。「自然の災害をできるだけ軽減するにはどうすればよいか」と示している。ところが、昭和26年の改訂では、その防災学習がなくなり、中学校1年生の単元に吸収されてしまったのである。その後の改訂でも、防災に関する内容は減少した。大幅に後退したのである。

このような状況を一変させたのが、阪神淡路大震災である。自らの安全を確保するための行動ができるようにすること、進んで他の人や集団、地域の安全に役立つこと、災害・防災について基礎的・基本的事項を理解することが求められたのである。その学習を支えたのが、平成10年に創設された「総合的な学習の時間」である。防災教育を行う上で大きな役割を担ったのである。しかし、学力低下が叫ばれると、その時間が縮小し、それに伴い、防災教育も衰退することになった。

このような歩みを経て、東日本大震災が発災したのである。子どもたちは、どのような状況で何を感じたのだろうか。子どもたちの学びを明らかにするため、作文集の分析を試みた。102編の作文から内容を分類し、12個の項目に整理した。その中から、子どもたちの学びを探るために、6個の項目に着目した。①家族の安否、②家族の有難さ、③友達の有難さ、④故郷への思い、⑤多くの人々への感謝、⑥前向きに生きる、である。さらに、その項目について、表出した語句を拾い集めて、分析した。その結果、家族や友達をはじめとして、多くの人たちと関わった経験が大きいことがわかった。被災した悲しさや苦しさを乗り越えて、他者と接しながら、自分の糧としてその経験を生かそうとする前向きさが見られた。家族を愛する心、友達を思いやる優しさ、郷土を愛する心を獲得することができたのである。それが、これから前向きに生きる力となったのである。多くの人に支えられ、それを力にして支える人になる強さ、生き抜くたくましさを感じられる。その地で生き抜くためには、道徳性の育成が大きく影響することが明らかになった。一人一人の内に込めた思いを言葉に表出し、それを伝えることができることは、子どもたちの大きな成長と考えられる。そこには、自己にとどまらない開かれた学びが創られたと思えるのである。その学びこそ道徳教育であると考ええる。

では、東日本大震災後、どのような防災教育を進め、行ってきたのだろうか。

自らの命を守り抜くための「主体的に行動する態度」の育成であり、助けられる人から助ける人になるたくましい行動力を身につけることである。それを千葉県に求め、東日本大震災後から行われた県の防災教育調査を探った。すると、画一的な訓練のみの防災教育が未だに行われているのが実情であることがわかった。危機意識の欠如した実効性のない防災教育にとどまっているのである。研究先進校の授業実践の記録を見ると、身を守るために必要な知識を獲得することに主眼が置かれていた。自らの命を守るスキルを身につける方法を主に学習してきたのである。その場に応じた適応行動を身につけさせることではない。いついかなる場所においても、危険を察知して判断し、身を守る行動が取れるように育てることである。未だに「知識の防災教育」から脱皮できない学校現場の問題点が見られた。

第3章では、防災教育に学ぶとして、主として、釜石市の防災教育及びその成果に学ぶ点を明らかにした。災害を自分事として捉え、誰しもが10年後、20年後につな

がる防災教育の学びを実践することが求められている。いつ起こるかわからない災害に、常日頃から、知識として、行動として身に付けるべき国民的課題である。このような現状を踏まえれば、やはり釜石市の防災教育に学ぶことが多い。主体的に判断し行動して多くの命を救った釜石の児童生徒から学ぶべきである。

釜石市は2008年（平成20年）に「防災教育支援モデル地域事業」の指定を受け、2010年（平成22年）「津波防災教育の手引き」を作成した。釜石市での津波防災教育の目的は、「児童・生徒に『自分の命は自分で守ることのできるチカラ』をつけること」さらに、「釜石市では、『釜石に住むことは津波に備えるのは当たり前』という文化を形成するとともに、『津波はたまに来るけど、釜石はこれほどまでに魅力的な郷土である』という郷土愛を育てていくこと」とし、「姿勢の防災教育」への転換を示し、釜石の子どもたちに、「津波避難の3原則」を指導した。「想定にとられるな」、「最善を尽くせ」、「率先避難者たれ」である。そこで、釜石市の防災教育を探るために、釜石小学校と釜石東中学校の2校に研究対象を絞った。

釜石小学校は、あの日は学年末の短縮授業で、ほとんどの子どもたちは下校していた。しかも、多くの子どもたちの家は津波浸水域にあった。しかし、2日後の3月13日午後3時2分。最後の1人の子どもの確認が取れた。釜石小学校184名、全員の無事確認。職員室で拍手が沸き上がった。学校にいない児童が、それぞれの判断で行動し、全員無事に避難できたのは奇跡としか思えないと称賛された。

一方、釜石東中学校では、地震が発生したのは帰りの会が終わったころだった。1年生は教室、2年生は部活動で教室を離れ、3年生は卒業式の準備をし、帰宅するころだった。学校にいた生徒がいっせいに走り始めた。指示がなくても、震災の状況を自分で判断して避難を開始し、定められた避難場所に直接向かった。その後、小学校の児童と共に介護施設へ避難したが、さらに次の避難場所へと避難した。この場所も危ないと判断し、高台をめざして生徒たちを避難させた。最終的に峠まで避難し、全員が助かることができたのである。これにより、学校にいた児童生徒は全員無事に避難できたと共に、中学生が率先避難者となったことで、多くの人々の命をも救うことができた。

釜石小学校では、平成20年度から地震や津波の知識を身に付け、「自分の命は自分で守る」ための教育を本格的に行っていた。具体的な教育活動は次の3点で、①防災マップ作り②下校時津波避難訓練③津波防災授業である。なかでも、「下校時津波避難訓練」が特徴的である。「下校コースごとに校庭から集団下校する。その下校途中、緊急地震速報と津波警報が流れ、最も近い避難場所を考え避難する」児童にはどのタイミングで放送が流れるかを知らせておらず、その時その場にいた児童たち自身で、最短での避難場所を選ぶことが求められた。

一方、釜石東中学校では、平成19年度から防災教育を本格的にスタートさせた。そのねらいとして、①自分の命を自分で守る②助けられる人から助ける人へ③防災文化の継承をあげている。ねらいを達成するため、「知識・理解」、「思考・判断」、「行動」を明確にして実践していた。「この地で生きていくために必要な取り組み」であるとし、その必要観を強調している。中学生といえども、地域社会の一員である。その自覚的な行動こそ、学習のめざす姿である。このように、自分で考え判断し、行動し

ていく過程において、学習者である生徒自らが他者への発信を試み、多くの人々の共感を得て、学習が成立したと考えられる。生徒の学びには主体的に判断する場が必要であり、それを継続していくことで、教師が予測できない学習効果を生んでいる。

平常時から災害が発生した状況をどれだけ現実感をもって意識させ、それに備えさせるのが、「自分事」として考える。学習の場面では、具体的な状況を提示し、「その時どうするか」といった問いかけをし、自らの対応策を考えさせるなどの機会を作ることが必要である。児童生徒の学びや気づきが、いざという時に備える「自分事」として内面化し、内部基準として形成されれば、災害に対する行動力を高めることにつながるのである。

生徒たちは、他者との関わりを得て、主体的に学ぶことができた。自分の自分たちの言葉で、防災の大切さを家族や地域へ発信してきた。それにより、自分が人の役に立つ、自分が必要とされているとの成就感を味わうことができたのである。「助けられる人から助ける人へ」の学びが、主体的な学びを自覚させ、人々の役に立つことを実感できたことは、学習の大きな成果であると思う。

第4章では、釜石市の防災教育から学んだ成果を、道徳教育に生かすことに論を進めた。主体的な学びとするためには、日頃から問題意識を持ち、常に自己に問いかけることが求められる。「どう思うのか」、「どう考えるのか」、「どうすべきなのか」、その学びには、自己という主体が必ず存在しなければならない。私たちが行うべき道徳教育には、常に自分事と考えさせることが求められているのである。第2章において筆者は、被災した児童生徒の作文を分析した結果、子どもたちが多くの方々と関わった経験が大きいと指摘した。他者と接しながら、その経験を生かそうとする前向きな学びが見られたのである。これから生きる力となり、生きる喜びを得ることができたのである。もはや、他者との関わりを持ちながら、自覚した価値を他者へ発信することが必要ではなからうか。それが、内面化を図る道徳学習から脱することになる。考えたこと思ったことを発信し、交流することにより学びが広がり、深まっていく。当然、学校内にとどまらず、家庭や地域への発信も必要となる。「私たちはこう思い、こう考える。だから、こうしましょう」と学習したことを広く伝えるのである。それが、実効性を高めることになる。

次に、道徳教育全体ではどのような改善を図らなければならないのだろうか。道徳科では、学びがつながることにより「高まる学び」となり、人とつながることにより「広がる学び」となる。しかし、週一時間の道徳科の学習だけでは、実効性を高めることはできない。ならば、道徳科の学習をどうつなげるのか。他教科領域の学習とどのようにつなげるのか。学びの連続が実効性を高めるのである。連続してつながることが大切であり、領域を超えた学びの場を創り出すことが必要となる。横断する学びが、柔軟で質の高い学びを創り出すことが求められる。

児童生徒が、自分事として問題意識を持つ「高まる学び」と他者と関わる学び「広がる学び」を経て、問題解決的な思考を得る「深まる学び」となる学習への転換を図らなければならないのである。

他者と「つながる学習」が、自己の学びに「つなげる学習」へと深化することが実

## 修士論文要旨

効性のある道德教育となることを述べてきた。深い学びは、「高まる学び」と「広がる学び」からもたらされる。他者とつながった学びが、自分事として考えた学びと結びつき「深い学び」となって問題を解決するのである。深い学びとは、「身になる学び」であり、「実になる学び」となり得る。自らが学びを統合することにより、実効性のある道德教育へと導くことができる。

その学びの先には、発信時とは異なる学びとなっているはずである。それがより深い学びとなると信ずる。学びは、すべて発展途上にある。「結果」を求めるより、「深化」や「進化」を求めるべきである。自分が想像していた以上の学びとなり、自分に返ってきた時、無上の喜びが得られると思う。深まる学びが学ぶ喜びとなり、実効性のある学びが創れるはずである。

最後に、今後の課題を記す。

### ①研究調査及び資料の収集と分析

- ア 阪神淡路大震災、東日本大震災、その他の災害時において、被災当時の児童生徒の避難行動を記録した資料を発掘したい。
- イ 防災教育と道德教育を結び付けた先行研究を調査することにより、幅の広い研究をめざしたい。例、「防災道德」（防災を題材にした教材開発・授業開発）
- ウ 防災教育と道德教育の関連を探るために、防災教育の先進地である釜石市の「いのちの教育」を再調査する。
- エ 防災教育と道德教育にどのように取り組んでいるか。釜石市以外の市町村での現地調査を行う。
- オ 資料分析の手法を学ぶ。（KHcoder 分析、因子分析など）
- カ 心理学からのアプローチを試みる。

自尊感情、「自己有用感」・「自己有能感」・「自己効力感」等を踏まえた研究

### ②新たな道德学習の構想と展開

防災と道德を結び付ける単元型道德学習を構想し、他者とつながる道德科の学習に取り組む。

### ③先人の知恵に学ぶ。「論語」、「老子」、「莊子」など中国古典を読み直す。

## 参考文献

- ・天野貞祐『国民実践要領』酣燈社(昭和 28 年)
- ・押谷由夫『「道德の時間」成立過程に関する研究—道德教育の新たな展開』東洋館出版社(2001 年)
- ・片田敏孝『命を守る教育 3.11 釜石からの教訓』PHP 研究所(2012 年)
- ・勝部真長『道德指導の基礎理論』日本教図(1967 年)
- ・沢田慶輔『道德教育と生活指導』光風出版(1960 年)
- ・寺田寅彦『天災と国防』(講談社学術文庫)「解説」(解説者：畑村洋太郎)(2011 年)
- ・寺田寅彦著・山折哲夫編『天災と日本人』寺田寅彦随筆選(角川ソフィア文庫)「日本人の自然観」(平成 23 年)

## 修士論文要旨

- ・ 広瀬弘忠『人はなぜ逃げおくれるのか—災害の心理学』集英社（2004年）
- ・ 編者森健『つなみ 被災地の子供たちの作文集 完全版』榊文藝春秋(2112年)
- ・ 柳沼良太『実効性のある道德教育』教育出版（2015年）
- ・ 行安茂・廣川正昭編『戦後道德教育を築いた人々と21世紀の課題』教育出版（2012年）
- ・ 釜石市『東日本大震災釜石市証言・記録集 伝えたい3.11の記憶』（2016年7月）
- ・ 釜石市『東日本大震災釜石市教訓集 未来の命を守るために』（2016年7月）
- ・ 釜石市教育委員会『釜石市津波防災教育の手引き』（平成22年）・（平成25年）
- ・ 釜石小学校『東日本大震災釜石小学校記録集「いきいき生きる」』（2012年）
- ・ 釜石地区小・中学校長会、東日本大震災記録集『そのとき学校は』（2012年）
- ・ 文科省『学校防災のための参考資料「生きる力を育む」防災教育の展開(平成25年)